

研究ノート

バイエルピアノ教則本の弾き方の研究

益子 州出男

Study of how to play the piano instruction book Beyer

MASHIKO Shudeo

はじめに

最近は色々なピアノ導入本がありますが、バイエルピアノ教則本はまだまだ初心者の導入書として多く用いられています。

又、埼玉県など小学校教員採用試験に於いてバイエルピアノ教則本の中から出題されている事もあり、小学校教員をめざす学生は是非勉強しておくべきである。

初心者を指導していると正確に読んで弾いている「つもり」になっている事が多くみられる。

初心者はまだ楽譜を読み取る力が完全ではなく、多くの者が同じ箇所でも同じ間違いをしている事に気が付く。

そこで、間違いやすい箇所の弾き方の注意点を述べていく。

初心者としてテクニックや脱力の仕方など学ぶことは沢山あるが、今回

益子 州出男

は「正確に読んだ音符を、正確に弾く」と言う事と「音楽的に幅を持たせる弾き方」を中心に述べていく。

バイエルピアノ教則本について

通称バイエルと言っているのは、フェルディナント・バイエル（1806～1863）ドイツの作曲者が作曲したピアノ奏法入門書（VORSCHULE IM KLAVIERSPIEL OP.101）の事である。

曲を練習するにあたっての注意点

はじめに注意する事は、新しい曲を練習する時にいきなり音符だけを読んで弾きだすのではなく、楽譜（速さ、拍子、音部記号、何調か、強弱、発想標語）を良く読んで曲全体を把握してから弾きださなければいけない。

これをしないと大きな間違いを起こしてしまう。

単純に書かれている楽譜も1つだけ音符が変化している事もあるので、丁寧に読んでから左右別々に練習をする事。

弾き方のポイント

テンポ

ほぼAndante, Moderato, Allegretto, Allegroで指示されている。

それぞれの速さの違いを認識して弾かないと、表現しようとする音楽が変わってしまうので指示は守る事。

ただし、譜読みが出来ない内は、ゆっくり丁寧に弾く。

音符の長さに関連するが、最初の音符が二分音符から始まる曲は、二分音符を一拍に数えて弾き出してしまう、指示された倍のテンポになってしまうの事が多い。

特に右手の旋律が二分音符から始まる曲は、初めの二分音符を1, 2と2つ数えて弾き出す事を意識しなければいけない。

バイエルピアノ教則本の中でAdagio という速度記号が99番に出てくる。

Adagioとは「ゆったりとAndanteより遅く」という意味なので4分音符を1拍に数えるのではなく、「1と2と3と4と」と8分音符の刻みを入れて弾き、速くならない様に注意する。

8分の6拍子は8分音符3つを一つの固りとし、付点4分音符の2拍子と数える。指示されているテンポはその2拍子の速さである。

1拍の音符の刻みが3連符以上になると、本人の弾き易い一拍の速さになり指示された速度記号より遅くなってしまいますので気を付ける事。

音符の長さ

音符の長さで一番いい加減になるのが曲の最後の音符である。

14番の様に小節内の1拍を数える音符の長さが変わらない曲は最後の小節の全音符もしっかり4つ数えて弾いているが、



曲の中で色々なリズムや長さの違う音符が多く出て来ると最後の音の長さがいい加減になってしまう。

悪い例として45番の最後の音符は2分音符であるが、前の音符が8分音符の連続になると最後の音符が短くなり4分音符になってしまう事が多い。曲をしっかり終わらせる為にも正確に数えなければいけない。



64番の様に同じ音の4分音符を弾き直す時は、指を上げるのが早くな

益子 州出男

り4分音符が8分音符になってしまう事が多い。



次の様に、1拍の裏の左手レの時に右手が鍵盤上に残っている様に意識する事が必要である。



又、この曲でもう一箇所気を付けるのが、三拍目から次の小節の1拍に掛けて切れない様にスラーを意識し弾く事である。

この曲の速さの指定はComodo（中くらいの速さで）となっているが、音の長さを意識する上で少し遅くても良いと思われる。

88番等に出て来る左手に多いこの形を弾く場合、



多くの者が最初の伸ばす音が短くなり、どうしても2分音符伸ばすべき音符が付点4分音符と8分休符になってしまう。



2分音符を1と2との「と」まで押さえてから手を上げるくせを身につける。

又、伸ばすのは2分音符だけで、8分音符は鍵盤上に指が残らない様に

する。

リズム

縦の線がずれているリズムを弾く場合は、基本的なリズムを繰り返して
いる方に合わせて弾くと流れが崩れない。

48番は左手の4分音符の刻みに右手のリズムを合わせる。

48. *Allegretto*

legato 基本のリズム

86番は基本的なテンポ、音の長さ、リズムの習得に有効な曲である。
音の流れが単純でユニゾン（左右同じ音）の為、安易に弾き出してしまう
が、それぞれの要素を弾き分ける事は非常に難しい。

生徒

Zur Einübung des Notenwertes
bis zu Sechzehnteln.

For practising the values of the
notes up to semiquavers.

これは、全音符から16分音符に至る
まで、それぞれの音符の長さを正しく
ひくための練習です。

86. *Moderato*

legato

staccato (スタカート) 音を短く(半分の長さに)切ってひきます。

テンポはまず指示されたテンポではなく、16分音符が左右崩れない速
さを一拍にして全体を弾く。

音符によって一拍の長さが変わらない様に数える。

益子 州出男

難しいのはリズムである。特に一拍の中に入る8分音符、3連符、16分音符の刻み違いが確実に分かっていないと、テンポも一拍の長さも崩れてしまう。

まず、8分音符は「かき」、3連符は「きのこ」、16分音符は「たけのこ」の様に、リズムを言葉に置き換えメトロノームに合わせて言う。

きちんとリズムの違いが理解出来たら言葉を言いながら弾き出す。

ピアノを弾くうえで大切な基本を身に付ける為にもしっかりと練習して欲しい曲である。

強弱

段の変わり目やリピートの所によって、強弱が変わることが多いので意識しておく事。

よく出てくるfからPの指示は、間にmfとmpがあるのでかなり差をつけて弾かなければならない。

又、強弱が変わると言うことは音楽が変わるのでプレスを入れ弾き直す事。

小指から始まるfは弱くなりがちになるので気を付ける事。

クレッシェンドやデクレッシェンド、ディミヌエンドの終わりに強弱記号ある場合はそれを意識した幅にしなければいけない。

例80番



旋律の音の数に比べて伴奏の方が多い場合（74番、92番）は、旋律が聞こえる様に左右の大きさのバランスを考えて弾く。

拍子にある強弱

3拍子は1拍目強・2拍目弱・3拍目弱となるが、62番の様に右手が上行形の8分音符の流れになっていると、本来は最初の「ド」が強くなるべき所がクレッシェンドになったり、3拍目のスタカートにアクセントが付いて強くなってしまいうので気を付けて弾く。

悪い例



又、55番の様な裏拍の短いリズムは2拍目や4拍目の裏を左右合わせようとして短い音符が強くなりがちになるので、裏拍の短い音符が強くない様に長い音符との強さのバランスに気を付ける事。

55.

フレーズ

フレーズはピアノを弾く上でとても重要なポイントである。

文章であれば句読点であり、それが無い文章を聴かされていると同様に、ブレスのない音楽は息苦しくなる。

初心者は手や腕に力が入っていて、手を上げてから弾き直す事が難しい。

そこで、旋律を歌いながら弾いてフレーズの切れ目でブレスをしながら一緒に手を上げる事をするとう力が抜けて柔らかく弾きなおせる。

又、ブレスをする時は、次の音楽(強弱、流れ)に合ったブレスをする。

益子 州出男

レガートとスラーは共に「なめらかに」と言う意味だが、意味合いが違う。

21番の様に左手がレガートと書かれている曲は曲全体を通してなめらかに弾いて良いが、

Moderato

21.

legato

レガートの指示なので切りたくない

22番の様にスラーで書かれている曲は左手を上げて弾き直す事を忘れてはいけない。

22.

スラー

切る

18番は本来なら右手のスラーが4小節まで繋がっているが、左手の和音が1小節ごと弾き直す時に右手のフレーズと一緒に切れてしまう事が多くみられる。

まず、左手の音の長さを短くして先に上げ、右手のスラーを気を付けて弾き、小節の頭で一緒に弾き直す。



それが十分意識して弾ける様になったら、左手の音符の長さを本来の付点2分音符に戻す。

65番は右手の旋律を左手が追いかける形を取っている。

旋律の最初の音（文章に例えれば主語である言葉）をしっかりと示す為にも、それぞれの前でプレスを取り、弾き直さなければいけない。

Moderato

65.

sempre legato

90番の様に和音をスラーで弾かなければならない時は、次に弾く同じ音を先に離して旋律に合わせて弾く様になると旋律が繋がリフレーズが切れない。



分散和音

分散和音を弾く時に手の形が悪くなって力が入ってしまう事が多い。

そこで、分散和音を和音にすると音の位置が分かり易くなり音がしっかり掴め、音の幅の確認と指使いも覚え易くなる。又、音が飛んだ時の距離感も掴める。

例55番

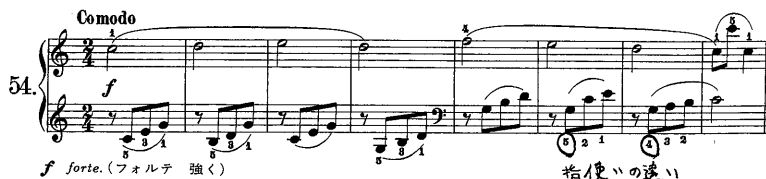


指使いの大切さ

ピアノを弾く上で基本的な指使いは必要不可欠な事である。

特に音階の指使いは非常に重要になってくるのでしっかり覚える事。

54番の左手の様と同じ音を弾く時に指使いが違うがあるが、これは和音を掴む指使いと主音に向かって行く指使いの違いなので番号が変わる事を意識して弾くこと。



装飾音符

装飾音符は字の通り飾る音なので装飾音符に力が入らないように軽く弾き、実音を大切に弾かなければいけない。

最初は装飾音符を取り除き実音の流れを覚えてから装飾音符を入れて弾くと音楽が崩れない。

例80番



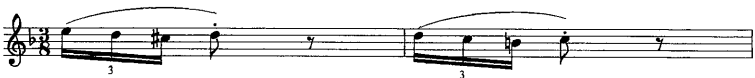
最初から早く弾くと実音とくっついてしまい、しっかり弾くべき実音より、軽く弾く装飾音符が同等又はそれ以上になってしまう。最初は装飾音符を長めに弾き力が抜けたら徐々に短くしていく。



100番のこの箇所の場合は



次の様になって拍の頭の「レ」のアクセントがなくなり、リズムが乱れてしまう事が多い。



この場合も装飾音符を取り除いて拍の頭の「レ」のアクセントとリズム

益子 州出男

を覚えてから装飾音符を付けて弾く様になると崩れずに弾ける。



音楽的要素を入れて弾く

楽譜上の音の読み方としては間違っていないがより音楽的に弾く注意点を述べていく。

バイエル教則本の中では2小節又は4小節ごとの様に同じ音を続けて用いている事がよくみられる。それを同じに弾くとただの繰り返しになってしまう。

そこで、前半がmf、後半がmpの様に、同じ大きさを弾かず強弱の差を付けて弾くと曲に幅が出る。

例55番の中間部



同様に、58番の中間部はクレッシェンド、デクレッシェンドも同じに付いているが、デジタル表示の様に示すと、前半の2小節が3～7、後半の2小節が2～4となる様にそれぞれ幅の違いを出して弾くと音楽に広がりが出る。



79番の最後の段はクレッシェンドの書き方が一緒だが、繰り返している曲の終止に向かっている二回目の方が大きくなる。



クレッシェンドは段々大きくと言う意味で、Pからクレッシェンドした大きさとmfからクレッシェンドした大きさは同じではない。

同様に、アクセントはその音を強くと言う意味で、Pに付いているアクセントとmfに付いているアクセントは同じ大きさではない。

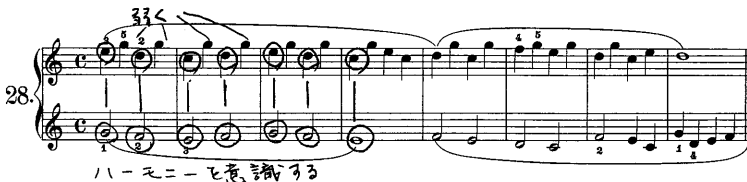
旋律の流れとハーモニーを意識

拍の裏拍が同じ音を弾いている時は表拍の旋律の流れを意識して弾く。

例56番



28番や39番の様に左右でハーモニーを作っている曲は、旋律の流れを出す為に、同じ音を弾いている2, 4拍は旋律の邪魔をしない様に弾く。



ただし、生徒の楽譜には強弱や発想標語が書いてないので、先生のパートに書いてあるディナーミクを参考にして合わせて弾くこと。

おわりに

以上述べてきた様に、バイエルピアノ教則本は色々な事を習得出来る優れた教則本である。

全体を大まかに見てきたが、一曲一曲には色んな注意点があり、指定した番号以外にも同様な注意をしなければいけない曲がある事は言わずとしたことである。

又、述べてきた事はバイエルピアノ教則本以外の曲にも応用出来る事である。

楽譜を丁寧に読み、この曲は何を勉強するかを理解する事によって、より良い練習が出来き、音楽的にも深みが出てくる。

「つもり」をなくすには自分の演奏を録音し聴く事や、人に聴いてもらう事である。

又、同じ曲を人がどの様に弾いているかを聴く事も大切である。

8分音符や発想記号、強弱の指示のない43番までに、旋律の流れやハーモニー、拍子による強弱をしっかりと身に付けておくと、テクニック的に難しくなるそれ以降の曲に対して、それぞれの対応が楽になる。

時間に余裕があれば全曲弾くに越した事はないが、それが無理な時は、それぞれのポイントを含んだ曲を選んでしっかり弾きこなせば、必要なものは十分習得出来るはずである。

この書がバイエルピアノ教則本を学んでいる人の参考になる事や途中で諦めてしまった学生の「手引き書」となり、再びピアノに向かうきっかけになってくれれば幸いです。

益 子 州出男

参考図書

全訳バイエルピアノ教則本 全音楽譜出版社

(本学教育学部非常勤講師)